

伊奈富神社式年大祭

雅樂奉納演奏

「祈りを

奏でる」



期日 令和三年四月十日

午前十一時

午後 二時

於 伊奈富神社境内

奉納 伊奈富雅樂会

はじめに

雅楽は、上代から伝わる日本固有の素朴で単純な音楽と、中国大陸や朝鮮半島などの古代アジア大陸の音楽が千四百年ほど前から順次伝来して結びつき、長い時を経て改良を重ね、平安時代中期に完成したものです。そして、現在までほぼ原型のまま存在している世界最古の合奏音楽です。

現在も国内で雅楽を伝承しているところは数多くあり、当社では後堀河天皇の御世、安貞三(一二二九)年の当社式年大祭について記された文書に「東遊、陵王、納曾利、楽人、簫(笙)師、鉦鼓師・・・」と書かれているなど、当社の雅楽は古くから伝承されています。

ごあいさつ

昨年奉納叶わなかった雅楽の音を、稻生の大神様に奉納すべく伊奈富雅楽会の皆様にご奉納頂きます。未だ新型コロナウイルス感染症に喘ぐ世情に、それぞれが苦悩し我慢を強いられる昨今ではありますが、一日も早い安寧を稻生の大神様に日々お祈り申し上げております。この度は、その祈りを雅楽の音に託して大神様に捧げます。例年の奉納演奏とは少し趣を異にした形でご奉納頂きます。祈りの音を神様と共にお楽しみ頂ければと存じます。

雅楽器について

笙(しょう) 細い十七本の竹の管を束ね、その根本に金属のリードが付いており、息を吸ったり吐いたりするとこのリードが振動して音を出す仕組みになっています。主として和音を演奏するのが役目です。古代の人は、その形を鳳凰が翼を立てて休む姿にたとえており、その音色を「天からさしこむ光」を表現していると伝えられています。

篳篥(ひちりき) 長さ一八センチの竹製の縦笛で葦を削って作ったリードを差し込み、息を吹きこんで音を出します。主に主旋律を演奏しますが、音域は狭く、男性が普通に出せる声の範囲と同じくらい(一オクターブと一音)で、太く力強い感じがします。古代の人はその音色から、人間の声、つまり「地の音」を表したとされています。

龍笛(りゅうてき) 長さ約四〇センチの竹製の横笛で、篳篥と同じ材質で作られています。音域は広く篳篥の主旋律を装飾したり、時には一緒に主旋律を演奏したりと多彩な役割もっています。古代の人はこの音色から、神の住む天と、人の住む地との間を泳ぎまわる龍の鳴き声と考え、つまり「空間」を表したといわれています。

